

## 郊外部再生・活性化特別委員会行政視察概要

1 視察月日 令和5年6月29日（木）～6月30日（金）

2 視察先及び視察事項

（1）平田観光株式会社（沖縄県石垣市）

やいまSDGsツアーについて

（2）八重山殖産株式会社（沖縄県石垣市）

SDGsに係るユウグレナの取組について

3 視察委員

委員長 山田 一 誠

副委員長 渋谷 健

委員 磯部 圭 太

委員 佐藤 茂

委員 長谷川 琢 磨

## 視察概要

### 1 視察先

平田観光株式会社（沖縄県石垣市）

### 2 視察月日

6月29日（木）

### 3 対応者

代表取締役（受け入れ挨拶・説明者）

### 4 視察内容

#### （1）やいまSDGsツアーについて

##### ア 平田観光株式会社

島間の連絡船や竹富島の水牛観光などで発展してきた平田観光であるが、現在は、外部から経営者を招くなどして、従来型にとられない積極的な取組を会社として続けている。

##### イ 背景・ねらい

オーバーツーリズムに悩む地域の現状、コロナや時代の流れを受けて変化してきた旅へのニーズを踏まえ、「八重山が掲げる新たな観光スタイル」を模索・確立していく。

単純に観光客を呼び込むということだけではなく、そこで暮らす人にとっても、訪れる人にとっても「持続可能」で幸せな観光のスタイルの確立を目指す。

##### ウ 事業概要

八重山にしかない自然・人・食・体験（ローカル）、島に根付いてきた、歴史と文化が継承するSDGsの精神（SDGs）、健康を基盤にして輝く人生をデザインしたくなる環境（ウェルネス）という異なる三つの視点から、特にウェルネス（身体・精神の健康、環境の健康、社会的健康を基盤にして輝く人生をデザインしていく生き方、自己実現）に軸足をおいた体験を提供していく旅のプランとなっている。

具体的には、仕事をしながら長期に滞在（ワーケーション）することで、ヨガや世界自然遺産である西表島の訪問、在住者との交流会等をプランに取り入れ、健康や楽しさ・生き方を追求し持続可能な自分・社会・地域を実感できるツアー内容となっている。

## エ 今後の課題

観光による消費が地域住民の所得や税収の増加に還元されにくい産業構造において、このツアーの取組が、共創による付加価値を生み出していくことにつなげていけるかや、地域の若手コミュニティとどのように連携していくかなどが挙げられる。

## オ 質疑概要

Q オーバーツーリズムということであるが、お金が地元に戻る経済的効果はないのか。お金が還流するのではないか。

A 実際のところ、目に見える形での地域住民への恩恵は少ないため、観光客誘致や観光地としての整備に対して、地元の意欲は高くはない。そのため、地域でも観光から利益を得ることができる住民とそれ以外の住民とで、意見の違いが生じることも多い。

Q コロナ禍後の状況はどのようになっているのか。

A コロナ禍前の労働力については、内地からの移住者と、短期アルバイトによって支えられていた。これらの労働力が、コロナ禍でニーズが少ない時期に解雇されてしまい、深刻な人手不足に陥っている。現状では、受け入れの許容数を超えてしまうため、閉業や、受けられないので断るということも生じるかもしれない。

Q やいまスタイルに対する反対意見はどのように乗り越えているか。

A 地域の問題を解決するための一つの方法であるという共通理解は進んでいる。ただ、それが地域の負担になるようであれば広まって行かないので、地元の人に大きな要望をすることは避けている。

その代わりに、観光客の意識を変え、問題を解決することに注力している。言い換えれば、地元が求める観光の在り方を、観光客に提案することで、課題の解決を図っている。

## (2) 委員所見

本市の郊外部においても、「ウェルネス」「SDGs」を意識した街づくりや取組を進めていくことで、環境問題や、健康で充実した生き方に関心の高い層（子育て世代等）に横浜が選ばれる契機になるのではないかと、考えるヒントを得ることができた。

特に、新たな価値観を創り出し共有することによって、地域住民と観光客等が、いずれも持続可能な形で共存させようとする取組は、都市部である横浜において採用可能な考え方だと感じられた。



(会議室にて説明聴取)

## 視察概要

### 1 視察先

八重山殖産株式会社（沖縄県石垣市）

### 2 視察月日

6月30日（金）

### 3 対応者

八重山殖産株式会社代表取締役社長（受け入れ挨拶・説明者）  
（株式会社ユーグレナR&Dセンター長）

### 4 視察内容

#### （1）SDGsに係るユーグレナの取組について

##### ア 事業目標

「サステナビリティファースト」、「世界初への志」をコアに、事業を通じて社会課題を解決することで、「人と地球を健康にする」ことを目指している。

##### イ ユーグレナの事業

植物と動物の両方の性質を持つユーグレナ（ミドリムシ）に着目して、豊富な栄養素を持つ食品としての活用のほか、二酸化炭素を吸収・油を細胞内に蓄積できるエコ素材や、さらには、ジェット燃料として活用していくため、石垣島では、ユーグレナの大量培養を行っている。

##### ウ 今後の展開

燃料については、バス・船舶・ジェット燃料など、陸・海・空の全ての領域でバイオ燃料供給先が拡大かつ多様化している。

またマレーシアにバイオ燃料商業プラント建設が検討され、供給量や、コスト削減による価格の低下も大きく期待される状況にあるほか、石垣市と連携し、石垣島の持続可能な発展等にも協力している。

##### エ 施設見学

ユーグレナの屋内培養、屋外培養など、製造の主要な点を見学

##### オ 質疑概要

Q バイオ燃料等について、行政との連携・取組はどのような状況か。

A 「国産バイオ燃料計画」、「GREEN OIL JAPAN」のプロジェクトに賛同し、その中で、国内各企業だけではなく、横浜市とも連携している。

また、石垣島における脱炭素・資源循環の取組においては、石垣市とも協力関係にあり、島内各施設のネーミングライツの獲得や理科実験教室などの地域支援活動として結実している。

Q バイオ燃料の普及に向けた課題は何か。

A コスト面が挙げられる。現状では、既存の石油由来の各種燃料と比較して、製造量も少なく、価格的にも競争力を持っていない。今後はプラントの増設などで生産量の増大を図るとともに、より環境負荷の低い燃料を使用する意識を浸透させ、価格を安くするとともに普及を図っていきたい。

Q 今後のユーグレナとしての戦略についてはどのように考えているか。

A バイオ燃料のベンチャーは燃料部門のみであり、上手くいかなかったが、ユーグレナは食品部門という収益の柱があるため、バイオ燃料の普及にチャレンジしていける強みがある。そこをしっかりとアピールしていきたい。

## (2) 委員所見

本市とも連携している同社では、ユーグレナ（ミドリムシ）という素材から、食品・バイオ燃料と事業を展開しており、改めて、その内容は興味深いと感じた。本市においても、こういった企業の研究所等を郊外部に積極的に誘致し、いわば「SDGs 城下町」のようなエリアを特区により作っていくことによって、新たな人とモノの流れを生み出せる可能性を感じた。



(会議室にて説明聴取)



(ユーグレナの屋外培養装置の横にて)